

『実 学 に つ い て』

— 私自身の歴史学研究と歴史の回顧を兼ねて —

奥 村 孝 亮

『実学について』

— 私自身の歴史学研究と歴史の回顧を兼ねて —

奥村孝亮

本日私にこの様な日を特に設けて下さった長崎ウエスレヤン短大に私は心から深く御礼申し上げます。

長い私の教師生活の中で多くの受業生であった学生諸兄弟に対してお詫びを言わねばならないとじっと考えつづけてきました。

授業のための準備不足のため、あるいは本の読み込みが十分でなかったために、不覚にも私が稚拙な誤りをしていることが後になって気がつきました。

受業生の卒業後にはお詫びをしようにもその機会はないのでした。

今そのお詫びをする機会を与えていただいたわけでありまして、私は本当に深く感謝致す次第です。

老弱の身の私にはとても実現できるはずもないことですが、それでも望みだけはあります。

もう一度京都の法然院にある河上肇・秀夫人のお墓に詣でたいのです。河井継之助の終焉の地である福島県只見町の塩沢を訪れたいのです。新潟の長岡の人河井ははるばると遠く岡山県の高梁に遊学します。彼が師事した陽明学者経世の人山田方谷の遺址を訪ねたいのです。京都は篠山町出身で小学校の教師に終始した歴史哲学者栗山周一の跡をとむらいたいのです。

早稲田大学の図書館では、文化人類学者西村真次をしのびたい、明治学院大学では基督教者沖野岩三郎の高大な業績をたゞえたく思います。明治学院の図書館には私が小学生の頃愛読しました童話小説「森の祈り」があります。その本を手にして私は、主人公日吉丸(多分その様な名まえであったと思います)少年と妹こずえ君に再会したいのです。

オランダの歴史家ホイジンガ、この人はしづかな挙動の中にも毅然としてナチに抵抗の姿勢を示した人ですが、この人についてもっと知りたい、イギリスのコリングウッドの著書をもっと読みたい(この人は栗山周一と生存の時期がほとんど一緒です)。

対独レジスタンスの先頭に立ったマルク・ブロック、彼が銃殺されたりヨンの野に立ってみたい、ドイツをかけ廻ってマイネツケ・クローチェ・ベルンハイム・ヤスパースをしのびたい、更には中国は厦門大学の魯迅の記念館を訪ねたい、希望が山程有るのです。(かつて私は厦門で一緑濃く大学の門とざしけり一と俳句を作ったことがあるのです。)

以上申し上げました先学たちは、実は私の精神の成長を助けていただいた人たちであります。

鎮西学院時代のことでありますが、教養科

長の中尾先生が、奥村さん、あなたの専攻をどう書いたらよからうかと問いかけられた事があります。

歴史学でよろしいのですねと答えましたものゝ、苦笑しました。中尾先生は私の敬愛する先生でした。

多分文部省かどこかに提出する文書を作成しておられたので、歴史学の小割りがほしかったのでしょう、日本史とか日本思想史とか。

正直申しまして、私は「歴史理論」と言いなかったのですが、そう言い切るだけの自信はなかったのです。しかし、この時から私は専攻科目は「歴史理論」と標榜することにしました。

「歴史理論」という言葉は一般になじみの薄いものです。

「歴史哲学」という言葉の方が多く目に付きます。

「歴史理論」も「歴史哲学」も共に歴史とは何ぞやという歴史の本質を追及してゆく学問でありましょうが、私は歴史哲学は、歴史の根源的な意味をあくまでも根源的に追求してゆく、歴史理論は、歴史学を構成する諸要素を（それは人物であり史料であり史実でありましょうが）あくまでも論理的に、思想的に思考追求してゆく、一その様に解釈しております。

実はこの様な考え方が私に起りましたのは戦後からでありまして、それまでは、私の考えは極めて単純でありました。

歴史は真実を知ることである、そのためには考証が重要である、考証に徹底しよう、そこに歴史家の生命がある、真実に基づかずし

て歴史家としていかほどの「もの」が言えようか、一その位の考えでした。当然史料を漁ります。しかし何のための史料漁りかということには余り十分な考えがありませんでした。

“山がそこにあるから登るのだ”という風なものであったようです。戦争が終って敗戦国民の運命に遭遇して私の「歴史学」はガラガラと崩れてしまったようでした。

歴史の研究には考証は必須のものです。

研究の当初から、研究の進行過程に於て、それは常につきまとうものです。真実に限りなく近づくことが必要であります。しかし真実を知ることには如何なる意義があるのか、そのことが考えられていなくては、歴史学にはなりません。

あべこべの様な言い方に聞こえますが、歴史家は、今まさに調べようとする歴史のおゝよその姿をはじめから予想しているのです。だからまあ歴史の研究にかゝるわけです。

さて歴史家は研究をすすめてあらゆる努力をして研究する当の真実に近づいたと思う、真実の認識が完全になったと思う、その時自分の勉強が、人生にとってどんな意義があったのか、この世の中に、この時代にどんな意義があるのか、そういうことが判るのです。はじめに戻って自分が研究しはじめたことが意義があったかどうかを思い至るわけです。

歴史の研究をはじめた時、その歴史家もそれまで全くムダに生きていたわけではないのです。

歴史家は、歴史学徒はやっぱり、世の中の1人であり、時代の子であるのです。

実は戦前、私もぼんやりと本を読んでいたわけではなかったのです。

論語の中にある「一以貫之」の意義を考えようとしたこともあります。あれやこれや諸書を読んで考えようと思いました。

教育方法に労作をとりいれた明末の顔習齊に関心を持ち顔李叢書を読みふけたこともあります。(顔李の李は顔氏の弟子李璵のことです。) 戦争の終りの頃です。

戦後、私は中国現代史の本を漁りました。

魯迅をしきりに読み、王国維に関心を持ちました。

その頃から私は、教師が自らの興味・関心を持つこと、それを勉強することもさることながら、歴史の教師は先ず教育者でなければならぬものであろう、目の前の若い受業生たちは夫々悩みをもち苦しんでもいるのだと考えるようになりました。この人たちの今を考え、将来を考えてゆかねばならないと思うようになりました。

それは一方で私が河上肇さんを好んで読んでいた関係もございましょう。

河上肇は、良心に生きようとする学者、それが政治権力との摩擦に苦しんだ適例でありましょう。

学問と実践という問題にも視点が移って来ます。

併行して私には実学という問題に視野が及んで行きます。「実学」という言葉が私の歴史研究の主題にもなったわけです。

さて、その実学という言葉ですが、日本の国語辞典数種に当たってみますと、“実際に役に立つ学問”というのが一般的のようであり

ます。(大修館の新漢和辞典1963、講談社国語辞典1966、三省堂国語辞典1968、岩波国語辞典1986、岩波漢語辞典1987、学修研究社漢和大辞典1988、至文堂新辞典1929)

大修館大漢和辞典(1955)及び岩波広辞苑第四版(1991)の解説では、中庸朱子章句から(其味無窮皆実学也)という言葉を引きしています。

それはそれでよいとしても、私は上記の言葉につづく言葉の方が中庸という本の性格をよく言い得ている言葉であると思っています。同時に(実学)という言葉にも当るものと考えています。——善読者玩索而有得焉則終身用之有不能尽者矣一。

この様に考えますと、至文堂の(実際身に行う学問)とか大修館の大漢和辞典の(実践躬行の学)とか、岩波広辞苑第四版の(空理空論でない実践の学、窮理の学)というのが“実学”の本意に近いのではないかと考えます。

“実学”と言えば先ず、熊本の横井小楠のことが思い起されますが、勿論それは、小楠以前に於ても日本漢学に於ては常識で通用したものの様です。

小楠は学問について、折々色々に言葉をかえて説明していますが、大別しますと、

○ 学問の眼目は思の一字に尽きる

○ 学問は修己の事のみである。(つまり修行ということ)

ということになるようです。

私はまちがいないと思います。

思(to think, zu denken)は確かに直観の反省作用だと思います。反省作用というのは、

比較・弁別・分析・総合のことと思います。
つまり、物の本質を知る認識作用と思います。
そういうことでありますなら、つまり、思は
(哲学する)ということであると思います。

ところで、思の本体、即ち哲学する主体は
現存在です。現存在は、誠に社会の一員であ
り、政治的人間です。認識実践する人でなく
て何でありましょう。

この経緯を論理的に明晰に知っていなければ
ならないと高橋里美さんの哲学は熱心に説
いています。

次に、学問は修行の学という小楠の意見は、
小楠の講義の中にもっともよく表われている
と思います。

小楠の講義を筆記したものが、山崎正董編
纂“横井小楠”下遺稿篇931～932頁「学而之
章」としてのこっています(筆記者不詳)。
その中に小楠は言っております。

(後世学者と言へば書を読み文を作る者
を指て云ふ様なれ共、古へを考れば決して
左様の義にてはなし。

堯舜以来孔夫子の時にも何ぞ曾て当節の
如き許多の書あらんや。且又古来の聖賢
読書にのみ精を勵み玉ふことも嘗て聞
ず。然則古人の所謂学なるもの果して如
何と見れば全く吾方寸の修行なり。良心
を拡充し日用事物の上にて功を用ゆれば
總て学に非ざるはなし。)

こゝに到って、私には当然大学に見える(格
物)が問題になります。

古来、格の意味については学者それぞれに
解釈があるわけです。即ちイタルとかタダス
とかキタスとか。

私は、誠に浅学非才の身ながら、窮極に於
ては、皆同義ではないかと思っています。

今の私には、山田方谷が(格とは其先後順
序を正しくする)という解釈に従っておりま
す。

最後に、私は、横井小楠が嘉永6年正月に
福井藩の村田氏寿に贈った書簡(文武一途の
説)、安政3年5月に柳川藩の立花壹岐へ贈
った書簡、及び国是三論の中の、特に士道篇
を紹介したいと思います。(以上、横井小楠
遺稿、下巻所収)

尚、最後に申し上げておきますが、小楠が
ここまで彼の学問を発展させてゆきましたの
は、彼の進取の性格もありましょうが、彼の
豊富な人生体験、徹底した読書、及び時代へ
の反応であったと思います。

彼はあくまでも政治の人でした。

以上